

三俣山荘における安全安心な登山をめざして

代表者 香西勝平（医学部医学科4年）

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、北アルプスの三俣山荘に併設された診療所で夏期に行われている診療活動に関して、図書を揃え医療の質を向上させることと、登山客へ登山における医学的知識と技術の普及活動を実施し安全を確保することを目的とします。

2. 実施期間（実施日）

平成27年7月24日 から 平成27年8月24日まで

参加者：香西勝平、鷲尾恵梨、似吹達弥、堀尾祐希、露口悠太、その他6名

3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業は、山荘に併設されている診療所にて診療活動を長年継続的に実施している中で、ここ数年、登山に関心を持つ若い女性並びに中高年の方が増えていることを考慮して立ち上げられました。これらの方々は登山ビギナーであり、登山に関する知識や緊急事態に備えた事前の準備が不十分な方も多いため、残念ながら怪我や病気にかかる方が増加する傾向にあります。



例年通り学生ができる診療活動として、バイタルサインの測定、予診（問診の前段階）、機器の用意、記録作成等を実施する中で、用いる図書として医薬品集のCD-ROMを導入しました。医薬品集の導入は三俣山荘や診療所を持たない近隣の山荘に設置されている救急箱の市販薬の成分、禁忌、用法などを調べ、医師の指導のもと学生が適切な指導を行う上で大いに役立ちました。これは診療班の活動期間外においても山荘スタッフの適切な対応を可能にし、三俣周辺一帯の登山の安全向上に貢献したと考えます。また診療所にいらっしゃる登山客の所持薬の検索がスムーズになり、より安全な医療を提供するこ

とができるようになりました。

また、昨年度から登山客への講習会を1回/2日実施しているのですが、話だけでは伝わりづらかったという反省を踏まえ、パソコン作成の可視化した資料を用いたプレゼンテーションを実施することにしました。このことでもたらされたのは、登山客の安全意識の向上と学生のプレゼンテーション能力の向上でした。また、講習会では熱中症と高山病、低体温症、熱中症の4つのテーマを用意し、学生が登山客の前でプレゼンテーションを実施したのですが、多くの質問が寄せられたことから関心を引き盛況だったと判断されます。なおこの講習会には診療所の活動期間を通して300名以上の登山客が参加しています。

講習会の様子（一班 7/24）



↑ 導入したパソコン

講習会の日程

班	テーマ	班ごとの参加人数
一班	7/24（高山病）7/26（ねんざ）	56
二班	7/28（低体温）7/29（高山病）	37
三班	8/2（高山病）8/5（熱中症）	52
四班	8/7（熱中症）	21
五班	8/11（低体温）8/13（高山病）	39
六班	8/14（ねんざ）8/16（高山病）	46
七班	8/19（低体温）8/20（高山病）	28
八班	8/22（低体温）8/23（高山病）	32
	計 15 回	計 311

※山荘二階のレストラン営業時間後に行った。

加えてプロジェクト事業によって導入されたパソコンはバッテリー性能がよく、日中の充電で山荘の発電機停止後も作業を継続することができました。これによりカルテをもとにしたエクセルでの医薬品の在庫管理が、診療の忙しい日中を避けて行えるようになりました。このことは在庫管理のミスを減らし、医薬品の適切な管理向上につながっ

たと考えています。

その他の活動としては継続している内容になりますが、登山安全を考慮したポスターの掲示、登山医学の研究などが挙げられます。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、登山客への講習会の中で自己紹介をする際に、香川大学の学生が診療所の活動に係わっていることを登山客の皆さんに周知し、認識いただけました。

また、登山客に対しても登山中に潜む危険因子について考えてもらう場を提供することができ、その対策についても理解し身に着けてもらう機会となりました。とりわけ、経験が浅いために対策が不十分で気軽に登山に出掛けている人々にとっては、自ら身の安全を考えて防ぐことの一助となったものと考えます。

本年度は昨年度より診療所の利用者が多く、その数は1.5倍で1日あたり平均5名となりました。学生が診療に関するできる限りのことを前もって準備し、資料を充実させ、丁寧に患者さんと向き合うことで、三侯山荘を訪れた登山客の皆さんの怪我や病気が重症化することを未然に食い止めることができたはずで、これは私たちの考える安全拠点としての三侯診療所にほかなりません。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

三侯診療班は、学生が間近で医療行為を見学し、可能な範囲でその補助を実施することで、医学並びに医療への好奇心を養い、その環境下での役割の重要性とやりがいを肌で感じることでできる貴重な機会となっています。医師や看護師の皆さんとコミュニケーションを取ることも、将来の自らの姿を描き、様々な選択肢を思い浮かべてみるきっかけとなっています。

また講習会に関して、一般の登山客の前でプレゼンテーションを実施し、人前で伝える能力を向上させることができ、大変有意義な場でした。

山小屋の診療所は訪れる人の動機が明確である点、機材が必要最低限である点から、需要と供給の面で一般の医療機関を単純化した組織であると捉えることができます。この場において将来の医師や看護師側ではなく、学生として第三者でありコメディカルに近い立場から医療を見つめることは、医療のあるべき姿を考えやすくしています。チーム医療をうまく機能させるよう、組織全体を見渡せる医療従事者となることは非常に重要であります。このことは医療が社会の中で求められる役割を十分に果たすことに繋がっていきはらずです。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

気づいたこと

- ・バイタルサインの測定、予診（問診の前段階）等の患者対応は事前準備を行っていることもあって年々上達しています。
- ・予想していたより多くの患者が訪れたことで、消耗品と薬剤が不足する事態となりましたが、近隣の診療所に要請して何とか乗り切ることができました。前年度の実績から物品の量を決定しているのですが、状況に応じたハンドリングを来年度以降考慮していかななくてはなりません。
- ・前年度以前の夢プロジェクトで導入させていただいた超音波洗浄機や酸素ポンプ等も含まれるのですが、設置機器を現地でいざ使用しようと思ってもその方法が分からないことがありました。この点に関しても勉強会、説明書の配布なりの事前準備が必要であると感じました。
- ・講習会における登山客からの質問は、登山客と私たちとの登山経験の差、医療知識の浅さから、なかなか明確にお答えすることができず、同席いただいた医師に頼ることが多かったです。経験の差は埋められないとしても体験談を登山経験が豊富な医師の方から伺うことと、知識の更なる習得として勉強会を実施することを続けていかななくてはなりません。

今後の展開

- ・講習会は新たなテーマを選定せず、前年度と今年度実施したテーマをブラッシュアップし、より登山客に分かりやすく、満足いただける内容を目指します。

7. 実施メンバー

代表者 香西 勝平（医学部4年）
構成員 鷺尾 恵梨（医学部3年）
中谷 元（医学部4年）
似吹 達弥（医学部4年）
藤原佳代子（医学部4年）
齊藤 謙二（医学部4年）
堀尾 祐希（医学部3年）
露口 悠太（医学部3年）